

54

## 江戸期河内地方の儒医たち その日常生活について——その二

田中 祐尾

大阪市立大学医学部

18世紀初頭、商都大坂に儒学塾「懐徳堂」ができ、京都の伊藤仁斎学派の人々が全国から知者を集め、庶民の儒学が育った。貨幣経済が大いに勃興し生活にも余裕が生まれた庶民階級には儒学の教育が容易に浸透していった。

中でも地元の正統派の儒医たちの教養の多くは、この懐徳堂もしくは片山北海主宰の「混沌社」を経た儒学及び漢詩の詩作などによるものが大きかったと言えよう。中国古医方や金・元・明・清朝医学を解釈するには文字を読んで理解するばかりではなく、当時渡来した朱子学などの精神的素養も要求されたのである。

長崎に到来した明清船やオランダ船経由の薬物・文物の集積地として、または全国からの水路が集まる「水都」となったことで、18世紀には大坂に薬問屋が出来た。幕府は「薬効改め処」を設置して規制をかけたが、大阪市内における医師たちや郊外の村医者たちは数が増えるにつれて、薬を主とした物産を独自に融通しあうネットワークを築き上げた。またネットワークができることは人的交流を促し、更なる医療技術の発展や治療方法の更新などの患者に益することも多かったのではなからうか？

彼ら儒医たちの日常生活がいかにあるべきかが問われたのは、公的な資格ではないために、腕で生きる医師として刻苦勉励して新技術や新知見を習得すること、反復襲来した疫病にいかに立ち向かうのか？患者個別にベストな方法を案出すること、またいろいろな薬物や医療技術を駆使することで少しでも快方に向かわせるように努力すること、また結果として治療の甲斐無く死にゆく患者たちへのせめて精神的に依存できる地域の指導者としての在り方が求められたと思われる。ただし村医者であっても厳然たる幕府支配体制においては、しょせんは庶民であり、そのあるべき姿として具現化したモデルは明(1368年漢民族の始祖)の「士大夫(シダイフ)」と朝鮮李王朝(1392年始祖)の「両班(ヤンバン)」といった階層の日常生活であった。

支配階級でなく、さりとて下層でもない。農・工・商そして貧困層をリードしたこの階級の人々の教養は上述の儒学であり、質素且つ永続的で約二世紀の歴史を刻んでいる。

大陸との交流の中で、当時の中国と朝鮮の地域的文化がそのまま受け入れられたわけではなかったが、趣味を含めた日常生活の様々な生き様が儒医の心をとらえたことは想像に難くない。

田中彌性園七代以降に受け継がれてその遺産が残っている遺物には、論語に言う「儒者(君子)のあるべき姿」に準えて書、漢詩帖、絵画とくに「四君子」、煎茶道の茶器、黄檗山由来の書画、篆刻、玉細工品といったものが挙げることができる。本発表ではこの一部を映像として供覧する。これらに彩られた大阪近郊における儒医の生活に思いを馳せてみよう。

また煎茶道はとくに禅宗と因縁が深く、19世紀木村兼葭堂が売茶翁からその遺産を受け継ぎ、彌性園八代田中元緝は兼葭堂に親炙を行っている。

煎茶道具の収集は昭和初期にまで至り、残された文物は現在識者による鑑識中である。

田中彌性園に残された遺物より江戸期儒医の生活を垣間見るとともに、彼らのよりどころとした地域の指導者としての「矜持」についても考えてみたいと思う。